

源氏物語評釈

空蟬

三

第三帖 空蟬 評釈

〔旧注〕并一。此巻は源氏君十六歳の夏の事なり。以^テ歌^ヲ為^シ巻^ノ名^ト。へうつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな。并の義は、先横を以て本とす。うつほ物語・浜松物語のごとし。但、此物語にかぎりて豎の并あり。此物語には并に三の品有。一には豎、二には横、三には横豎をかねたり。豎とは此巻の類なり。此巻は帚木の末の事を書つづけたり。さて横とは、蓬生の巻の類なり。みをつくしの初の時分の事を書たり。是はみをつくしのはじめにかくべき事の、そこにかかれねば、別に一卷としたる也。横豎をかねたるは、末摘花の巻の類なり。はじめは若紫より前の事あり、末には若紫より後の事あり云々。

〔玉〕帚木巻の同年にて、源氏君十七歳なり。十六とするは誤なること、上にいへるがごとし。これよりつぎつぎ処女^{マユメ}巻まで、諸抄一年のたがひ有とするべし。

〔新〕誰やらん、此文に豎横てふ事をいひ出したるに、其理りかける物のいひなしわろく、理り明らかならず。先豎とは本系の事にて、源氏はもとより、葵^{アヅミ}上などの本系の類をいふ。此空蟬の巻などの類は、本系にはあらねど、帚木の巻よりつづきて一ツの筋なれば、横といふべからず。よりて豎の并とはいへり云々。これも巻々の惣ての心しらしめん料なれば、さも有べし。されどかかる事にいと心をつけずとも、本末をよくよみとく時はおのづからしらるる也。今の人は、かく様の事にのみ目をくらし、文の意をよくよみとかぬなるべし。

〔釈〕案に、旧注に并^{ナラビ}の巻の事をいはれたること、一わたりは心得おくべし。されども、新釈・小櫛などにいはれたるごとく、しひてさだすべき事に

ごとくなれば、これより次の巻々には皆はぶきて、小櫛の年立をのみ用ゐたり。

〔評〕この巻は、帚木^{ハヅキ}巻の末をゆくりかにきりて一卷としたるなれば、よろづかの巻の脈に続けてよむべし。源氏君、御方違に中河の宿へおはして、一夜空蟬^{ソラセミ}君にあひ給へりしなごりを、猶せちにおぼしわすれでふたたびおはしたるに、空蟬のかくれて逢奉らざりしかば、又さらにたばかりてしのび入給へるに、空蟬と軒端^{ソノヘ}萩と相對ひて碁を打てありしをかいまみ給へる所など、殊にめづらかにかきなされたり。かくて人をしづめてしのびより給へるに、空蟬の君のひそかにすべり出て、おもひかけぬ軒端萩にあひ給へるなど、いといとめづらしくめでたし。さて夜ふかく出給へるに、老ごだちのよりきてとがめたる所、其さまをまさめに見るがごとくにて、いとをかしくめでたし。さてすべて此巻は、空蟬の君の用意のいみじきをいふ事主なる故に、軒端萩をとり出て、あわづかにそろかなる人の清らかにうつくしきさまにいひて、それを客として主とある空蟬の用意のいみじきをつよくきかせたるたくみ、いみじくめでたし。さるは、女はひたぶるにかたちのめでたきのみによらず、ただふかく心しらひして、かたちをもふるまひをもなだらかにおだしくめやすくもてつけて、人にかろめあなづられぬさまにもてなし、又世中のとある事かかる事をもわきまへ、物のあはれをもおもひしりながら、見しらぬさまにもてなし、よろづ大どかにふるまふべき事どもを、ふかく此空蟬の君の上にとどめてあらはし見せたるなり。されば、かのもぬけのくだりよりして、末々もいと心にくきさまにかかれたるを、心とどめてあぢはふへし。

○空蟬のもぬけのくだりに、軒端^{ソノヘ}萩のいぎたなく用意なきさまをあらはしたるは、れいの反対の脈^{スヂ}なるを、源氏君の本意の人のすべり出てかく

もあらず。さて并とは、横に並びたるをこそいはめ、豎の并といふことは理りきこえぬいひざまなり。これは一つらにつぎたることをしかいへるなれば、続^{ツヅキ}の巻などはいひもしつべし。然れども、ふるくいひ馴きつるに随ひて、今はたこれを改めず、おして并の巻といひてあるべし。さるは、さしも本文の意にあづかる事にもあらざれば也。さて諸注にい

はれたるごとく、蓬生^{モウセイ}巻関屋^{セツミヤ}巻などは横の并にて、みをつくしの巻にかくべき事を人によりて分ちかけるなれば、論なし。此巻又夕顔巻などは帚木^{ハヅキ}巻のつづきにて、さらに並びたる事なければいかなれども、帚木より夕顔までは一つらにつぎたる文なれば、しばらくそれを分たん為におして并といひてありなんか。末摘花を「横豎をかねたり」とあるも、いひざまよろしからず。これは若紫の并にはあれど、反対の法にて筆をかへたるにて、年月の続きは却て夕顔よりうけたり。さて末には若紫の事ももびかせていへれば、并の中に続をかねたりなどこそいはめ。されど、これもまた旧きに随ひつ。さばれ、とにかくに理りの貫かぬいひざまなれば、一説に、桐壺を一とし帚木を二とし、空蟬をはき木の并一とし夕顔を并二とし、さて若紫を三としたるなどは、すべて用ゐず。ならびの巻とはいへども、一二三の次第^{ツグナリ}はつぎつぎ五十四帖にして、并の巻を例なる物として、其前の巻に属^{ツケ}る類としたる物とは見えざれば、今は空蟬を三、夕顔を四としてついでたり。又玉かづらの巻の次、初音^{ハツネ}巻より次々楨柱^{ツヅキ}巻までの九巻を、すべて玉葛の豎の并とせられたるなどは、殊にいはれなし。かしこは玉葛^{タマカズ}君の事を多く書たる所なれども、すべては源氏君の栄えのさかりを年をおひてかたるを主^{ムネ}としたるなれば、さらに玉葛の并にはあらぬものをや。猶そこにもいふべし。とにもかくにも、かやうの事どもは大かたにしてさしおくべし。さてまた年立の事は、旧注は処女^{マユメ}巻までは一年づつのたがひあること、玉小櫛いはれたる

れたるにせんかたなくして、俄におもひうつり給へるさまに転してかかれたるなど、ゆくりなく事を引たがへて興としたるたくみにして、いとめでたし。さて老ごだちのとがめたるは、又其余波をあやなして、事のあへなくをさまらんことを惜みたるにほひの筆なる物から、其中にかるがろしき御忍びありきのあやふきよしをいましめたり。末に小君のわたりありくにつけて、空蟬と軒端^{ソノヘ}萩との思ふ心をとりに書分たれたるなど、例のめでたし。さて空蟬の歌の末に詞なくて此巻をどちめられたるは、巻の初のゆくりなきにひびかせたるものと見えて、首尾あひかなへり。いたづらに見過すべからずなん。

ねられ給はぬままに

〔花〕帚木巻の終の詞につづけてかけり。いまだ中河のやどりにとまり給ひての事なり。

〔評〕巻の分ちぎまいとめづらし。帚木巻に小君と共に寝給ひし事をいひをはりて、この巻の初にかく書おこしたる、思ひの外のこちして、いとをかし。なほざりに見過すべからず。

われはかく

〔新〕余りの御心やましさに、いとせて小君にかくの給ふ也。次に「例のやうにものたまひまつはさず」とあるをもておもへば、女にもかたりぬべしとおぼすよりなるべし。

にくまれてもならはぬを

〔釈〕人に憎まれたる事はをさをさなきを、といふ意也。「ならはぬ」は、未馴ぬにて、俗になれ来らぬといふがことし。

ながらふまじくこそ

〔釈〕いとはづかしき物思ひに、存命しがたきやうにも思ふ、との給ふ也。てさぐりの

〔釈〕帚木巻にいへるごとく、男色をほめかしたる書ざま、これにてしるべし。男色ならずして「手さぐり」などは、いふべくもあらず。手さぐりのちひさく、髪の長からざる小君がけはひの、空蟬に似たるを、わが御思ひなしにや、あはれにおぼしめすよし也。

あながちにかづらひ

〔湖師〕帚木巻に、「かくれたらん所にだに、なほゐていけどの給へど」といへる所をうけて聞べし。かのかくれまでたづねより給はんも、人めわるからんと也。

おほしあかしつつ

〔釈〕めざましとおぼしながら、夜を明し給ふ意也。のたまひまつはさず

〔釈〕「まつはす」とは、ねんごろにむつましくし給ふこと也。さうさうしと思ふ

〔釈〕中河の家、ここに終れり。次は、其後に空蟬のおもふ心也。おほしこりにけると

〔玉補〕「ける」の下によの字をそへて心得べし。此類所々に多し。必しもてにををはの誤又写し誤にもあらず。

やがてつれなくて云々

〔評〕空蟬の心につれなきにこり給ふよと思ふにつけても、速に思ひ絶給はばさすがにうかるべし、さりとて又強て思ひかけ給ふ事どもの絶ざらんもうたてあるべし、中ほどのよき所にて止んと思ふものから、さすがに心にかかりて物思ひがちにながめらるゝと也。人の心のくまぐま、げにかくもこそとおぼえて、いとあはれふかし。

ただならすながめがちなり

〔新〕さは思ひながらも、何となく直なるよりはしたはしき也云々。

たばかれ

〔新〕古へ「たばかる」といふは、只おもひはかるをいふ。後世偽りあざむく心をかめるやうにおもへるは、古書の意にかなはず。

かかるかたにても

〔釈〕「かかる方」とは、好色のすちをいふ。小君、源氏君のめでたきに感じ奉りける故に、わづらはしきことをせさせ給ふは面倒なれど、ねんごろにしたしうの給ふをうれしと思ふ、と也。これも男色をほめかしたる脈なり。

源氏君

ねられ給はぬままに、われはかく人にくまれてもならはぬを、こ

今

よひなんはじめてうしと世をおもひしりぬれば、はづかしうて、な

存

がらふまじくこそ思ひなりぬれ、などのたまへば、涙をさへこぼし

マデ

てふしたり。いとらうたしとおぼす。てさぐりのほそくちひさきほ

アン

ど、かみのいとながからざりしけはひのさま、似かよひたるも、思

ア

ひなしにやあはれなり。あながちにかかづらひたどりやらんも、人

ザマ

わるかるべく、まめやかにめざましとおぼしあかしつつ、れいのや

イッモノ

うにものたまひまつはさず。夜ふかくいで給へばこの子はいといと

オキ

ほしくさうさうしと思ふ『女もなみなみならず、かたはらいたしと

ナ

おもふに、御せうそこもたえてなし。おぼしこりにけるとおもふに

ヨ

も、やがてつれなくて、やみ給ひなましかば、うからまし。しひて

強

いとほしき御ふるまひの絶ざらんも、うたてあるべし。よきほとに

ゲン

かくてどちめてん、とおもふものから、ただならすながめがちな

アンジ

り◎君は、心づきなしとはおぼしながら、かくてはえやむまじう御

得 止

心にかかり、人わろくおもほしわびて、こぎみに、いとつらうもう

ドウ

れたくもおぼゆるに、しひて思ひかへせど、心にしもしたがはずく

従

るしきを、さりぬべきをりみて、たいめすべくたばかれ、とのた

計

まひわたれば、わづらはしけれど、かかるかたにてもものたまひまつ

方

はすは、うれしうおぼえけり』をさなきここに、いかならんをり

小君

にか、とまちわたるに、きのかみくにくだりなどして、女どちの

コ

タやみの

〔河〕万葉四（ゆふやみは道たどとし月まちてかへれわがせこそそのまにも見ん

わが車にてゐて奉る

〔釈〕小君我車にのせ奉りて率てゆく意也。

どやかなる（タやみの、みちたどたどしげなるまぎれに、わが車に
コロシヅカ ヨヒヤミ 路 オボツカナゲ
てゐて奉る。このこもをさなきを、いかならんとおぼせど、さのみ
率 源氏心 見 ドウデアラウ
もえおぼしのどむまじかりければ、さりげなきすがたにて、門など
シヅム ナンノコトモナキ フウ

ささぬさきに、といそぎおはす。人みぬかたよりひきいれて、おろ
額 前 △源氏ヲ下 △車ヲ

したてまつる。わらはなれば、とのぬ人なども、ことに見れつぬ
童 バンニン 殊 追

そうせず心やすし。ひんがしのつまどにたて奉りて、我はみなみの
従 東 妻 戸 △源氏ヲタタセ 小君 南

すみのまよりかうしたたきののしりていりぬ。ごだちあらはなりと
角 間 格 子 殿 仰山ニイヒタテテ 入 御 等 顕 露

いふなり。なぞかうあつきに、このかうしはおろされたる、ととへ
小君詞 如此 暑 格子 下 間

ば、ひるよりにしの御かたのわたらせ給ひて、ごうたせ給ふといふ。
屋 西 △空ノ方ヘ 碁 打

さてむかひぬたらんを見ばや、と思ひて、やをらあゆみいでて、す
*源心 向合 居 ソロリト 歩 出

だれのはざまにいり給ひぬ。この入つるかうしはまだささねば、ひ
簾 狭 間 △小君ノ 格 子 間

まみゆるによりて、にしざまに見とほし給へば、このきはにたてた
隙 西 様 透 際

る屏風も、はしのかたおしたたまれたるに、まぎるべき几帳なども、
端 方 畳 眼 遮

あつければにやうちかけて、いとよくみいれらる。火ちかうともし
暑 見 入 近

たり。も屋のなかばしらにそばめる人や、わがこころかくる、とま
中 柱 側 △人ナレ一

づめとどめ給へば、こきあやのひとへがさねなめり、なににかあら
バン目 留 濃 綾 単 重

んうへにきて、かしらつきほそやかにちひさき人の、ものげなきす
表 着 頭 細 小 ミダテナキ

がたぞしたる。かほなどは、さしむかひたる人などにも、わざと見
姿 顔 イたらん ノキハノ狭

ゆまじうもてなしたり。てつきやせやせとして、いたうひきかくし
トリナシ 手 瘦 々 イにて 隠

ためり。いまひとりひんがしむきにて、のこる所なくみゆ。しろ
一 人 東 向 白

ことに見れつるそうせず

〔釈〕「みいれ」は、小君の方を見入る也。「つるそう」は、追従なり。その字は下学集に見ゆと余滴にいへり。

ひんがしのつまどに云々

〔釈〕南向の家、東の妻戸ある所に源氏君を立せ奉りて、小君はその南の角の間の格子をたたきて「あけよ」などいひて、わざとさわがしくののしりあけさせて入たる也。さて其跡をそのままにあげ置て源氏を入奉らんとせしを、女房見て「あらはなり」といへるなり。さるを、小君はなほあけおかせんとて、格子の下されたる故を問ふ也。此わたりのさま、絵がける人に声あるこちして、いとめでたし。

にしの御かたの

〔細〕伊与介のむすめ軒端、秋也。空蟬のまま子也。此家の西の方にあたりてすめるなるべし。

さて向ひぬたらんを見ばやと思ひて

〔評〕小君とごだちとの問答をいひさして、源氏君のかいま見を説出せる筆づかひ、さらにめでたし。このうちに小君は入て、もののけしきを見るなるべし。下に「小君いでくるこちすれば」とある所へ相照して見るべし。

やをらあゆみいでて

〔釈〕妻戸の口を歩み出で簾のはざまに入給ふ也。

この入つるかうしは

〔評〕小君とごだちの問答しながら入たる故に、事にまぎれてその跡をまださらぬとなり。これ源氏君のかいまみの道を開きて、下のありさまをあらはし出んまうけ也としるべし。

にしざまに見とほし

〔細〕唯今源氏は、たつみの方よりすぢかひて西のかたへ見とほし給ふなり。このきはにたてたる屏風も

〔釈〕「このきは」とは、格子のきは也。格子にそへてたてたる屏風も、端の方たたまれたる也。これも小君が入し跡なるべし。さて又其内にたてそへたる几帳も、暑ければ帷を上へ打かけて、その下よりよく見入らる也。下の小君が詞に「格子には几帳そへて侍」とあるに合せ考ふべし。火ちかうともしたり

〔釈〕これより内のありさまを語る也。或抄に、「碁をうつ故燈ちかき也」といへり。

もやの中柱に

〔釈〕「もや」は母屋の意なるよし、拾遺にいはれたり。主人の常に居る処也。「中柱」は壁につかぬ所の柱なり。それに空蟬はよりそひてあるなるべし。「側める」は、横によりそへるかたちなり。

なににかあらんうへにきて

〔評〕夜の見わたしの近からぬに、柱によりてよくも見えぬさまを顕さんことと「何にかあらん」といへる、めでたし。

かほなども云々

〔評〕これより空蟬の用意ふかきさまをいへり。此段、かたちよからねど用意ふかき人と、かたちよけれど用意なき人とを、反対としたり。よくよく味はふべし。

手つき云々

〔釈〕碁を打には手あらはなるべきをも、よきほどに引かくす也。用意浅からぬ体なり。

「うちきだつ物

〔**釈**〕「だつ」は、「めく」と云に等しき形容辭也。これも遠き故におしはかりていへるなり。

きうすもののひとへがさね、ふたあゐの＊こうちきだつもの、ないが＊
しるにきなして、くれなゐの孟袴ノ腰也こしひきゆへるきはまでも、むねあら胸 顯

はに、露ばうジダラクそくなるもてなしなり。いとしろうをかしげにつぶつふ身ガマヘ

とこえて、トフトリそそ。ろかなる人の、かしらつきひたひつき、ものあざや頭 額

かに、まみくちつき、いとあいぎやうづき、はなやかなるかたちな愛 敬

り。かみはいとふさやかにて、ながくはあらねど、さ＊がりばかたの下 端 肩

ほどいときよげに、すべてねぢけたるところなく、をかしげなる人アンバイ 清 戀 ユガミ ウツクシゲ

と見えたり。＊うべこそおやの世になくはおもふらめ、とをかしく見

給ふ。＊こちぞなほしづかなるけをそへばや、とふとみゆる。かど＊
ココロモチ モチツト 氣 フイト オ

なきにはあるまじ。＊ごうちはてて、けちさすわたり、心とげに見えて、＊
碁 竟 ダメサス ヘン ハヤサウ

〔**釈**〕源氏君の心になりて、草子地より評じたるなり。文勢あぢはひあり。ごうちはてて

かどなきにはあるまじ

〔**評**〕これより上には容貌のめでたきよしをあげて、ここにそのさわがしきをおとしめたり。空蟬は先ツかたちのわるきをいひて、次に用意のふかきをあらはせり。抑揚反対その法おこそかなりといふべし。

うべこそおやの

〔**釈**〕これよりさきに、伊与介が我むすめを世に又なく思ふうはさなどを聞給ひたるさまに書る也。

心ちぞ猶しづかなるけをそへばや

おくの人は

〔**細**〕空蟬也。坐敷の奥なるべし。

そこはちにこそあらめ

〔**玉補**〕「持」は、今俗にいふ「せき」の事也。唐の碁の書に見えたり。

〔**雅集**〕左伝正義「奕棋謂不能相害為持」。

すみの所々

〔**釈**〕碁盤のすみの地をかそふるさま也。「および」はただ指の事なること、上に見えたり。

いよのゆげたま

〔**花**〕孟六花集に古歌とて出せり。いよのゆのゆげたまはいくつ、いさしらず九ツ中は十六。すべて三十三有といへり。

〔**河**〕余体源抄伊予湯雄芸備馬楽いよのゆのゆげたまはいくつ、いさしらずやかずへずや、かすへずよまずや、そよやなや君ぞしるらんや

〔**細**〕数多き事にいふ也。又今父の伊与へ下りたる留守也。似合たる詞也。

〔**釈**〕軒端萩の碁の地をかそふるさまのあわつかなるを、かの「左八右九」などいふ湯げたのかそへぎまによそへて、「たどたどしかるまじ」と戯れたるなり。

すこししなおくれたり

〔**釈**〕軒端萩の人品空蟬より少しおとりたりといへる也。上の「かどなきにはあるまじ」といふ語と同じく、源氏君の心になりて草子地より評じたる也。

たとしへなく口おほひて

〔**玉**〕軒端萩のぼうそくなるもてなしとはいたく異にして、たとへがたきよし也。

ねびれて

〔**玉**〕「あざやかなる所なう」といひ、「にははしき所もみえず」といへるぞ、すなはち此詞の注のごとくなる。

ざやかなる所なうね＊びれて、にははしきところも見えず。いひたつ＊
ツキリトシタ ハナバナシキ カゾヘタテ

ればわるきによれるかたちを、いといたうもてつけて、このまさ＊れ
レバ 寄 容貌 タシナミツツシンデ △力タチノ

ちおほひて、さやかにも見せねど、めをしつとつけ給へれば、おの＊
口 覆 サツハリトモ 目 ツツト 着

づからそばめにみゆ。めすこしはれたるこちして、はななどもあ＊
ゼント ヨコムキ 目 少 腫 鼻

かがめて、とをはたみそよそなどかぞふるさま、いよのゆげたま＊
屈 十 二十三 三十四 十 算 フウ 湯 桁 フ

どたどしかるまじうみゆ。すこししなおくれたり。たとしへなくく＊
アンナイニアル ヒンオトリ イハウヤウモナク

ど、い＊でこのたびはまけにけり。すみの所々い＊いで、とおよびを＊
軒端萩詞 イヤモ 負 隅 ドレドレ 指

きはきはとさうどけば、おくの人はいとしづかにのどめて、まち給＊
テキ ハキ トザワ ツケ ハ 奥 空セミ オチツイテ 待

へや。そこ＊はちにこそあらめ。このわたりのこ＊うをこそ、などいへ＊
伊ヤモ 持 劫

る人よりは、心あらん、とめとどめつべきさまじたり。にぎははし＊
目 留 状 軒端萩貌

まめならぬ御心は

〔**釈**〕好色のかたに信実ならぬ御心には、軒はの萩をあわつけしとは見おとし給ひながら、えおぼしうて給ふまじ、と草子地より戯れて評じたる也。

〔**評**〕これやがて下の人たがへを引出べきためのした隊なりとするへし。

見給ふかぎりの人は

〔**釈**〕源氏君のこれまで見給ふほどの人は、うはべを引つくるひて打とけず、用意して打もむかはぬさまにして見え参らすれば、かう打とけたる人のさまはまだ見給はず、と也。「そばめたる」とは、用意して正目には向はぬさまに恥らひたるかたちしたるをいふ。

かいまみ

〔**新**〕本は垣間よりひそかに見るより出て、何処にてもひそかに見るをかいまみといふ。

〔**釈**〕この「かいまみ」は用言也。ありさまをかいまみなどは、といふ意なり。なに心もなう云々

〔**釈**〕空蟬も軒端萩も見る人有ともしらず、何心なくてさやかに見られたるは、その人のためにいたはしと思ししながら、といふ意也。○「見給へまほしきに」とあるは、写しひがめたる也。改むべし。

わた殿の戸ぐちに

〔**細**〕前より此戸口に居給ひしやうにして、小君に見え給ふなり。いとかたじけなしと思ひて

〔**釈**〕久しく待せ奉りぬと思ひて、小君が恐多しと思へる也。

例ならぬ人侍りて

〔**釈**〕常にはあらぬ人ありて、空蟬の傍へ近くもえよらずといふ意也。其世の礼儀思ふべし。

あなたにかへり侍りなば

〔**釈**〕軒端萩の、おのがすむ西の方へかへりなば、といふ意也。

さまなびかしつべき

〔**釈**〕小君が「たばかり侍なん」といふをきき給ひて、「さやうにもいひなびかすべき空蟬のけしきならん。小君はわらはなれど、ものの心ばへ、人のけしきは察すべくしづまりたれば」と思ひ給ふ意なり。此所いささか紛らはしきを、かく見ざれば心得がたし。よくよく思ふべし。

このみかうしはさしてんとて

〔**釈**〕上文に、小君が「たたきののしりて入ぬ」といひ、次に「此入つかうしはまだささねば」といへる格子の事にて、今また小君が出て外にあるを、女房のささんどて「わか君は云々」といひておろして鳴す也。格子の首尾、殊にととのひてめでたし。「ならず」は、格子をさすとして音さするをいへる也。

しづまりぬなり

〔**釈**〕寝静まりぬるなり。ここより源氏君の詞也。小櫛に地の詞とせられたるはわろきよし、同補遺にもいへり。

いもうと

〔**釈**〕妹人の義也。いにしへは、夫妻兄弟ともに男より女をば次第にかかはらず妹といへり。ここもその意にて、空蟬の事也。このほどまではさる詞の遣りしなるべし。

たわむ所なくまめだちたれば

〔**釈**〕貞実なるすぢをたてて、いささかも撓まずなびかぬ意也。

くあいぎやうづきをかしげなるを、

いよいよほこりにうちとけて

わらひなどそぼるれば、にほひおほく見えて、さるかたにいとをか

しき人のさまなり。あわつけしとはおぼしながら、まめならぬ御心

は、これもえおぼしはなつまじかりけり。見給ふかぎりの人は、う

ちとけたるよなく、ひきつくるひそばめたる、うはべをのみこそ見

給へ、かくうちとけたる人のありさまかいまみなどは、まだし給は

ざりつることなれば、なにごろもなうさやかなるは、いとほしな

がら、ひさしう見給へまほしきに、こ君いでくるこちすれば、や

をら出給ぬ。わたどのの戸ぐちによりぬ給へり。いとかたじけなし

と思ひて、れいならぬ人侍りて、えちかうもより侍らず。さてこよ

ひもやかへしてんとする。いとあさましうからうこそあべけれ、と

の給へば、などてか、あなたにかへり侍りなば、たばかり侍りなん

ときこゆ。さまなびかしつべきけしきにこそはあらめ。わらはなれ

ど、物の心ばへ、人のけしきみつべくしづまれるを、とおぼすなり

けり。ごうちはてつるにやあらん、うちそよめくこちして、人々

あがるるけはひなどすなり。わか君はいづくにおはしますならん。

このみかうしはさしてん、とてならすなり。しづまりぬなり。いり

てさらばたばかれ、とのたまふ。この子もいもうとの御心は、たわ

む所なくまめだちたれば、いひあはせんかたなくて、人ずくななら

んをりに、いれ奉らんと思ふなりけり。きのかみのいもうともこな

かうしには木丁そへて

〔**釈**〕かいまみすべき格子には几帳をたてそへてあれば見えがたし、と申す也。
さかし

〔**玉**〕さやうぞかしなり。「かうしには木丁そへて侍」と申せること也。
このたびはつまどを

〔**釈**〕かうしはすでにさしたれば、このたびは妻戸をたたきてあけさせて入る也。心をつけて見るべし。
みな人々しづまりねにけり

〔**評**〕ここにて人々の寝しづまれるを、たしかにことわりたる也。例の委しき書ざまなり。

このさうじ口に

〔**釈**〕小君、涼しき所にねんとするさまにもてなして、入たる所のはし近きさうじぐちにふして、源氏を入れ奉んとはかる也。

たたみひろげて

〔**余**〕古への畳は今のうすべり也云々。

〔**釈**〕案に、此説よろし。「風吹とほせ」といひたるは、はしちかくねたるゆゑを人に聞しめん為也。さて常にねぬ所なれば敷べき物なき故に、うすべりの畳をひろげて其上に臥たる也。諸注に屏風の事とせられたるはわろし。

ごだち東のひさしに

〔**評**〕空蟬の方に人すくなきよしをかかんとて、まづかくいへる也。

戸はなちつる童も

〔**評**〕上に「妻戸をたたきている」とある時に、内より戸をあけたるわらは也。上に其よしをばいはざれどもあけたる人は必あるべきを思ひて、かくかきとぢめたる筆づかひ、例のいとくはしくめでたし。

〔**釈**〕「そなたに」とは、ごだちのねたる東庇也。されば此童は、女のわらはなるべし。

をこがましき事もこそ

〔**釈**〕或説に、「心をあはせたる事にもあらず、幼き人をするべにていかがと危く思しめせど也」といへり。

もやの木丁のかたびら

〔**釈**〕空蟬の寝たるもやの木丁の帷を引あげて、そこより入給ふ也。
やはらかなるしも云々

〔**釈**〕人皆寝しづまりては物おとのよく聞ゆるものなれば、源氏の和らかなる御衣のけはひもいといちじくる聞えたるさま也。

あやしく夢のやうなる事の

〔**釈**〕「夢のやうなる事」は、さきに一度源氏君にあひ参らせたること也。この比忘れ給ふやうなるをうれしとは思ひながら、さすがに忘れがたく心にはなれず思ひ出らるる比にて、といふ意也。
心とけたるいだにねられず

〔**河**〕余、君こふる涙のかかる冬の夜はこころとけたるいだにねられず拾遺集・恋・よみ人しらず。結句「いやはねらるる」とあり。
〔**釈**〕心をゆるべ、打とけてうまくねられぬ也。

ひるはながめ云々

〔**河**〕よるはさめひるはながめにくらされて春はこのめもいとなりけり余謙徳公集に女の歌とて載て有。四の句「春のこのめ」とせり。

〔**釈**〕昼は物思ひに空をながめ、夜もまた物思ひにねざめがちなれば、この目もいとまなく歎かしきに、といふ意を此歌によりてかける也。此目に木芽をいひかけたるはさらにもいはず、今は夏の時なれば春ならぬとことわりたる、いとめでたし。

ひとへ打かけたる木丁の

〔**万**〕木丁のかたびら二重なるべきを、夏なれば「ひとへ」とかけり。
〔**釈**〕伴雄云、かさねのひとへを二重ぬぎて木丁にかけおきたる也といへり。
うちみじろぎ

〔**釈**〕しづかに身を動かす形容をいへる詞にて、俗に「むぐめく」といふに近し。諸注みなかなひがたし。

たにあるか、われにかいまみせさせよ、との給へば、いかでかさは
方 在 ノソキメ

侍らん。かうしには几帳そへて侍る、ときこゆ。さかし。されども、
*格 子 タテソヘ △モノヲ 源氏心 サウシヤ △見リ

とをかしくおぼせど、みつとはしらせじ。いとほしとおぼして、よ
可 笑 ミタ △小君ニモ マイ キノドクナ 夜

ふくることの心もとなさをのたまふ。このたびはつまどをたたきて
更 マチドホサ *小君 妻 戸 殿

いる。みな人々しづまりねにけり。このさうじぐちにまろはねたら
入 寝 *小君詞 障 子 口 ワシ ネテヲラ

ん。風吹とほせ、とてたたみひろげてふす。ごだちひんがしのひさ
ウ 通 畳 臥 東 庇

しに、いとあまたねたるべし。とはなちつるわらはも、そなたにい
大 小 戸 アケ 童 女 其 方

りてふしぬれば、とばかりそらねして、火あかきかたに屏風をひろ
臥 中 ト ネタフリ 明

げて、かげほのかなるに、やをらいれ奉る。いかにぞ、をこがまし
影 カスカ ソツト 源氏心 ドウデアロ バカラシ

きこともこそ、とおぼすにいとつつましけれど、みちびくままに、
イ △アラメ キミワル △小君方 導 ツツシマシ

*もやの几帳のかたびらひきあげて、いとやをらいり給ふとすれど、
身 屋 帷 引 上 イカニモソロリト

みなしづまれる夜の御ぞのけはひ、やはらかなるしもいとじるかり
皆 人 ネシヅマレル 衣 サオト 和 著

けり。女はさこそわすれ給ふを、うれしきに思ひなせど、あやしく
△源ノ △コト フシギニ

夢のやうなることの、心にはなるるをりなき比にて、心とけたる
イ 離

+いだにねられずなん、ひるはながめよるはねざめがちなれば、春
寝 寝 * 〓

ならぬこのめも、いとなくなげかしきに、暮うちつる君、こよひは
ヒ マナク ノキバノ紙

こなたに、といまめかしくうちかたらひてねにけり。わかき人は
此 方 △トマラン メヅラシク タウセイフウニ 談 若

何心なく、いとよくまどろみたるべし。かかるけはひの、いとかう
ネ イリ サオト 香

ばしく打にほふに、かほをもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳
蕉 顔 モチアゲ 懸

のすきまに、くらけれど、うちみじろぎよるけはひいとしるし。あ
透 間 暗 ムグメキ ケシキ 著 キヨ

ひとへひとつをきて

〔新〕いとあつければ、肌にはひとへのみきて、小桂コツギはもとより、衣もみな上におきてふしたれば、其ひとへのみにて、外をばすべしおきて出たる也。

すべり出にけり

〔釈〕ひそかにすべりぬけて逃出たる也。「すべる」とは、立ずして居ながらはひ出るをいふ也。

ゆかのしもに

〔釈〕空蟬のねたる下段の間の床の下に、女房二人ばかりふしたる也。其外は皆東の庇に入て寝たるなり。

あやしくやうかはりて

〔釈〕軒端、荻のいきたなきさまなど、空蟬とはさまかはりたる也。さて「さまなどぞ」とあるぞもじは、「やうかはりて」といふまでへ係る意とは聞ゆれど、さてはその結びなくていかがなり。「やうかはれるに」など有べくおぼゆ。もしくは字のおちたるならんか。考ふべし。

人たがへとたどりて見えんも

〔新〕人たがへと見えんもはちあるがうへに、空蟬にかよふならん此人にあやしまれんは人のためいとしとなるべし。

ほいの人を

〔釈〕本意の空蟬を尋ねんにも、かくまでのがるる心あれば、尋るかひもなくあはずして却てをここにこそ思はめ、と也。

かのをかしかりつる

〔釈〕暮を打てありし時、火かげに見給ひたるかたちならば、よしやいかがはせんとおぼして、軒端、荻に御心うつるさまなり。かれ、「わろき御心あさなめりかし」と地より評じたるなり。

世中をまだ思ひしらぬほどよりは

〔釈〕世中とは男女のなからひをいふ。軒端、荻は、男女のなからひをまだしらぬほどらひよりはざればみたるかたにて、源氏君のかくより來給へるをも、何事ぞなど案外にはおもひ惑はず、と也。万水一露に、「はや前に人にあひたるやうにおぼえ給ふ、と也」といへるは、いみじきひがこと也。

世をつつむも

〔余〕「つつむ」は、「つつしむ」といはんがごとし。

〔釈〕言のことは「つつしむ」と同じけれど、「つつむ」は「かくす」と云かたなり。

たどらん人は

〔釈〕「たどらん」とは、おしあてに推察してさぐり知んといふ意也。「心得つべけれど」とは、空蟬への御心ざしと心得つべけれど也。

さこそさし過たるやうなれど

〔釈〕上に「世中をまだ思ひしらぬほどよりは、ざればみたるかたにて」とある首尾也。しかざればみてさし過たるやうなれど、をさなければえしらぬ也。

さましくおぼえて、ともかくも思ひわかれず。やをらおき出て、す

ウサメウ

分別

ソツト起

生

ずしなるひとへひとつをきて、すべり出にけり。君は入給ひて、た

絹

單

着

スボヌケ

源氏

だひとりふしたるを心やすくおぼす。ゆかのしもに二人ばかりぞふ

一人

臥

床

下

したる。きぬをおしやりてより給へるに、ありしけはひよりは、も

衣

ノケ

最初ノグアヒ

コ

のものしくおぼゆれど、おもほしもよらずかし。いぎたなきさまな

エタルヤウニ

△空手ラストハ

ネゴイ
メノサメヌ

どぞ、あやしくやうかはりて、やうやう見あらはし給ひて、あさま

〔*〕
フシンニ

〔*〕
シタイシタイニ

顯

キヨウサ

しく心やましけれど、人たがへとたどりて見えんも、をこがましく

メウ コメンダウナレド

〔*〕
サクリアシニミラレン

アホウラシク
バカバカシク

あやしと思ふべし。ほいの人をたづねやらんも、かばかりのがるる

フシギナコト

〔*〕
フシギナコト

寄

コレホド

心あめれば、かひなくをここにこそおもはめとおぼす。かのをかしか

〔*〕
バカ

〔*〕
ウツクシカ

りつるほかげならば、いかがはせんにおぼしなるも、わろき御心あ

ツタ

火影 △ノ人

ドウシヤウ △ママヨ

イヒ

ささなめりかし。やうやうめさめて、いとおぼえすあさましきに、

浅

ソロソロ

オモヒカケズ キモノツブレタコトニ

あきたるけしきにて、なにの心ふかくいとほしきよういもなし。

〔*〕
キノドクナ

用意

世中をまだ思ひしらぬほどよりは、ざればみたるかたにて、あゑか

〔*〕
セノ

クラキ

シヤレ

ハカナ

にも思ひまどはず。われともしらせじとおもほせど、いかにしてか

ウモ

惑

源氏

ドウシテコノヤ

かる事ぞ、と後におもひめぐらさんも、わがためにはことにもあら

ウナ

△軒

マハサン

ナンデモナケ

ねど、あのつらき人の、あながちによをつつむも、さすがにいとほ

レド

ツレナキ 空セミ

ムシヤウニ

〔*〕
サウハ云モノノ

しければ、たびたびの御かたがへにことつけ給ひしさまを、いと

〔*〕
方 違

カコツケ

よいいひなし給ふ。たどらん人は心えつべけれど、まだいとわかき

〔*〕
サゲラン

ここに、さこそさしすぎたるやうなれど、えしも思ひわかず。に

〔*〕
デスギタ

〔*〕
得 分

くしとはなけれど、御心とまるべきゆゑもなきここにして、なほか

憎

キニイル

ワケ

ヤハリ

あやにくにまぎれがたう

〔釈〕かくしふねき人はなしとおぼしめさば、さても思ひ絶給ふべきを、あやにくに思ひ出られ給ふ、と也。帚木巻の初に、「あやにくに心づくしなる事を云々」とある脈にて、源氏君の本上なり。心をつくべし。

人しりたることよりも

〔釈〕「なべて世に顕はれ、人に知られたる中よりも、かやうにひそかに相見るは、物のあはれもふかくそふ事と昔の人もいへり。されば、必相思ひ給へよ」との給ふなり。「昔の人もいひける」とあるには、引歌などあるべき所なり。考ふべし。

つつむことなきにしもあらねば

〔釈〕世に憚らずかよひ来べき身にしもあらねば、我身ながらわが心にもまかせがたし、と也。

さるべき人々も

〔釈〕「人々」は、伊与介・紀伊守などをさしての給ふなるべし。

なほなほしく

〔玉〕花鳥に「よのつねのなほざりにかたらふ心なるべし」とあるぞよろしき。すべて此詞は俗言に「なんでもない」といふ意也。

〔評〕かくのたまふは、軒端萩の御心につかぬ故に、今よりとだえおき給はんしたくみをしてのたまふやうに書なせしさま、言の外ににほひたりえきこえさすまじき

〔湖〕消息などもえ申かはすまじきと也。

かのぬぎすべしたりと見ゆるうす衣

〔玉〕一本に「かく」有ぞよろしき。ぬぎすべしたる事は、源氏君はたしかには知給ふまじければ、「と見ゆる」といふ詞あるべければ也云々。

〔釈〕「ぬぎすべし」は、ぬぎすべらかして捨置たる也。上に「ひとへひとつをきて」とあるにてらして見るべし。

ふとおとろきぬ

〔釈〕驚きてさめたる也。

戸をやをらおしあくるに

〔釈〕さきに童にあけさせて小君が入たるつま戸なるべし。「老たるごだち」は、東の庇にねたる女房のうちなるべし。

さかしがりてとざまへく

〔新〕賢ぶりして也。

〔釈〕老女のかしこだてして外の方へあゆみくる也。余滴などに小君を云としたるはひがこと也。

いとにくくて

〔釈〕小君が心に、老女のさかしがるをにくくおぼえて也。※本文に「いと」はない。

あらず

〔玉〕俗言に「いや何事でもない」といふ意なり。

暁ちかき月

〔万〕前に「夕やみ」とかける詞の次第、面白し。

又おはするはたそこと云々

〔細〕此女のいふ也。「たそ」とひて、また「民部のおもと也」と自問自答する也。花鳥には「少輔のおもと」とあり。本のかはり也。

〔花〕「おもと」は、お局などいふが如し。

のうれたき人のころを、いみじくおぼす。いづこにはひまぎれて、ツレナキ空セミ

かたくなしと思ひぬたらん。かくしふねき人は^{執念}ありがたき物を、と^{グチナコト}アホウラシイ

おもほすにしも、あやにくにまぎれがたう思ひ出られ給ふ。この人^{△空セミノコガ}

のなに心なく、わかやかなるけはひもあはれなれば、さすがになさ^若

けなさけしく契りおかせ給ふ。人しりたる事よりも、かやうなるは^{＊源詞}^{△ノ}

あはれもそふこととなん、むかしの人もいひける。あひ思ひ給へよ。^添

つつむことなきにしもあらねば、身ながら心にもえまかすまじくな[＊]^{カクス}

んありける。又さるべき人々もゆるされじかし、とかねてむねいた[＊]^然^免^{イマカラ心痛}

くなん。わすれでまち給へよ、などなほなほしくかたらひ給ふ。人[＊]^{△アル}^忘^待^{モットモラシク}^{軒端}

の思ひ侍らんことはづかしきになん、え聞えさすまじき、とうら[＊]^{萩詞}^少^{オクソ}

もなくいふ。なべて人にしらせばこそあらめ。このちひさきうへ人^{源詞}^{イの}^{△サウモ}^{小君なり}

などにつたへてきこえん。けしきなくもてなし給へ、などいひおき^{伊も}^{△サウモ}^置

て、かのぬぎすべしたり、と見ゆるうすぎぬをとりて出給ひぬ。こ[＊]^{△空セミ}^ス^テ^{薄衣}

君ちかくふしたるをおこし給へば、うしろめたう思ひつつねければ、^近^起^{キヅカハシウ}^寝

ふとおどろきぬ。戸をやをらおしあくるに、おいたるごだちのこゑ[＊]^{ソット}^開^老^{御等}

にて、あれはたそ、とおどろおどろしくとふ。わづらはしくて、ま^誰^{ギヤウサンニ}^問^{小君}^{コメンダウニテ}^ワ

ろぞといらふ。夜中にこはなぞありかせ給ふ、ときかしがりて、と^{シチヤ}^答^此^何^歩^行^{カシコ}^外

ざまへく。にくくて、あらず。ここもとへ出るぞ、とて君をおし出^{＊小君心}^{＊詞}^{サウデハナイ}

奉るに、あかつきちかき月、くまなくさしいでて、ふと人のかげみ[＊]^暁^限^{湖源のかげ也}^影

えければ、またおはするはたそ、ととふ。みんなのおもとなめり。[＊]^{△一人}^誰^問^{民部}^{御許}^ン

いまだ今立ならび給ひなん

小君が背長の、ただ今のほどに民部のおもとばかりになりて立並び給ふべし、と云也。老女のくちつきをいよくうつしかかれたりといふべし。この戸より

〔**積**〕小君があけたる戸口より老ごだちも出てくる也。わびしけれと

〔**積**〕源氏君也。「おしかへさで」は、おしかへして返答もえし給はぬ也。湖月に「老女のくるをとどめがたき心也」とあるは、少したがへり。渡殿の口に

〔**積**〕上に「わた殿の戸口に」と有し所也。「かいそひて」は、引そひて也。うへにやさふらひ給ひつる

〔**玉**〕或抄に「『うへ』とは主人のおはします所をさしていふ也」といへる、よろし云々。次の文に「しもに侍つる」といへる「下」と對へて心得べし。「しも」は下屋也。

いらへもきかであなはらはら

〔**積**〕返答をも聞ずして行過たる也。「今聞えん」とは、後に委く語らんといふがこき意也。

〔**新**〕「はらはら」は、「腹いたし」といふべきを「いたし」とまではないひあへぬなり。

いよいよおほしこりぬべし

〔**積**〕「いよいよ」といへるは、上に「この子をさなきを、いかならんとおぼせど」といひ、「いかにぞ、をこがましき事もこそ、とおぼすに」などあるに對へて、「いよいよ」とはいへるなり。湖月師説に「空蟬のつれなきにこり給ふうへに云々」といへるはたがへり。

〔**評**〕この老ごだちに出あひ給へる一段は、例の余情に書そへたるものにて、人たがへの事の儀にあへなくをさまらん事を惜みたる筆づかひなるべし。いといとめでたし。

御くるまのしりにて

〔**積**〕小君御車のしりに乗て御供するなり。

つまはじきをして

〔**積**〕ふかく恨むる時のさま也。「つまはじき」は、爪さきをたわめて弾くことなり。

身もつく

〔**新**〕こは身を恥る語にて、歌に「うき身」といふに同じ。

ありつるこうちきを

〔**評**〕上に「うす衣をとりて」とあるを、ここに小桂といひて、うすぎぬやがてこうちきなるよしをおもはせ、さて下に「かのうす衣は、こうちきの云々」とかきあらはされたり。心をつくべし。

けしうはあらぬおもとのたけだちかなといふ。草子地
セイノタカイ

ねにわらはるるをいふなりけり。常
笑 おい人これをつらねてありきける

と思ひて、＊ 今ただいま、たちならび給ひなん、といふいふ、われも

この戸よりいでてく。＊ わびしけれど、えはたおしかへさで、わた殿

のくちにかいそひて、かくれたち給へれば、このおもとさしよりて、

おもとはこよひはうへにやさふらひ給ひつる。＊ をとどひよりはらを

やみて、いとわりなければ、しもに侍りつるを、人ずくななりとて

めししかば、よべまうのぼりしかど、なほえたふまじくなん、とう

れふ。＊ いらへもきかで、あなはらはら、いまきこえむ、とてすぎぬ

るに、からうじていで給ふ。＊ なほかかるありきは、かるがるしくあ

やふかりけり、といよいよおぼしこりぬべし『こ君御車のしりにて、

二条院におはしましぬ。＊ ありさまのたまひて、をさなかりけり、と

あはめ給ひて、かの人の心を、つまはじきをしつづうらみ給ふ。＊ い

とほしうてものもえ聞えず。＊ いとふかうにくみ給ふべかめれば、身

もうく思ひはてぬ。＊ などかよそにても、なつかしきいらへばかりは

し給ふまじき。＊ いよのすけにおとりける身こそ、など心づきなしと

おもひての給ふ。＊ ありつるこうちきを、さすがに御そのしたにひき

いれて、おほとのごもれり。＊ こ君をおまへにふせて、よろづにうら

みかつはかたらひ給ふ。＊ あこはらうたけれど、つらきゆかりにこそ、

えおもひはつまじけれ、とまめやかにのたまふを、いとわびしと思

御硯いそぎめして

〔**釈**〕或抄に「早朝未明に也」といへる、よろし。さらでは「いそぎ」といふ事、用なく聞ゆ。

たたうがみ

〔**釈**〕紙を疊みてふところに入おきて、用ある時つかふを「たたうがみ」といふ。今世のはな紙のごとし。

うつせみの身をかへてける

〔**釈**〕「うつせみ」は、ここにてはただ蟬の事なり。「身をかへてける」とは、蟬の蛻けたるを云。さるからに「空」といふことをかろくそへていへるまで也。一首の意は、我をいとひてにげ隠れたるはうらめしけれど、猶用意ある人品のなつかしき、といひて、「人がら」に蟬の蛻けたる「殻」をいひよせて、かの小桂を人の殻とさしたるたくみなり。「このもとに」といへるは、蟬の樹下にて蛻くるになぞらへて、かのきぬを脱すべしたる所をいへる也。諸注用なき事のみ多くして、歌の意をとかれたるもなきは、いかにぞや。

かたがたおもほしかへして

〔**釈**〕空蟬の思ふ心、かつは小君が心などをさまざまに懼り給ふを、「かたがた」とはいへるなるべし。

人が

〔**湖**〕人香也。うつりがの事也。

心をさなきを

〔**釈**〕おとなしき心なくあさはかに嫌したる事を、「心をさなく」といへる也。ひだりみぎに

〔**花**〕源氏はこの事故に恨み給ふ、あね君ははづかしめ給ふ、小君が左右にくるしく思ふ也。

御手ならひ

〔**釈**〕手をならすためにむだがきするをいふ。今世にいふとはすこし異也。さすがにとりて見給ふ

〔**釈**〕小君をはづかしめたるものから、さすがにとりて見る也。「給ふ」とかけるは、地の語ながら小君が心になりていへるにや。下に「わたり給ひにけり」とあるも同じ。

いせをのあまの

〔**河**〕後撰「すずか川伊勢をのあまのすて衣しほなれけりと人や見るらん。心は「猶人がらのなつかしきかな」とあるをみて、「きならしたる物を」などはづかしく思ふ也」云々。

〔**釈**〕「しほなれ」は、垢じみよごれたるをいへる也。ただならず

〔**湖**〕源氏をおもふ故也。

〔**釈**〕この説のごとし。ただにはあらで、さまざまに思ひみだるる也。わたり給ひにけり

〔**釈**〕「わたり」といふ語、こなたへ来るがごとくにも聞ゆれど、「物はづかしき心ちして」とあれば、旧注のごとく、かへりたるなるべし。

小君のわたりありくに

〔**釈**〕源氏の御もとより空蟬の方へ来てありくなり。

〔**新**〕此小君して聞え給ふべし、と契りおき給ひしに、さもなきをおもふなり。

御せうそこもなし

〔**釈**〕男女あひたる又のあした、消息する事は、そのかみのならはしなり。

あさましと云々

〔**釈**〕御せうそこもなきを、我を疎みてならんとて、あさましとも心得ずして、さし過たる心に物さびしく思ふ、と也。

ありながらの云々

〔**河**〕とりかへす物にもがなや世中をありしながらのわが身とおもはん〔**釈**〕此歌、帚木にもありて既にいへり。ここもその意にて、「もとのままの身ならば源氏にしたがひ奉るべき事もあらんを」と、とりかへされぬ昔の思ひ出られて、しのびがたきよし也。

ひとり。しばし打やすみ給へど、ねられ給はず。御すずりいそぎめ源 硯

して、さしはへたる御ふみにはあらで、たたうがみに、てならひのイ 紙 手 習

やうにかきすさび給ふ。

うつけみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきか源 蟬 ム 紙 手 習

な。とかき給へるを、ふところにひきいれてもたり。かの人もいか小 源 懐 中 入 持 有 ノ 紙 手 習

におもふらん、といとほしけれど、かたがたおもほしかへして、御小 源 懐 中 入 持 有 ノ 紙 手 習

ことづてもなし。かのうすぎぬは、こうちきのいとなつかしき人が小 桂 香

にしめるを、身ぢかくならしつつ見ぬ給へり。こ君かしこにいきた染 有 朝 彼 廻 往

れば、あね君まちつけて、いみじうの給ふ。あさましかりしに、と空 詞 小 桂 香

かくまぎらはしても、人のおもはんことさり所なきに、いとなんわカ 小 桂 香

りなき。いとかう心をさなきを、かつはいかにおもほすらん、とてイ 心 小 桂 香

はづかしめ給ふ。ひだりみぎにくるしくおもへど、かの御てならひ小 君 阿 チ 小 桂 香

とりいでたり。さすがにとりて見給ふ。かのもぬけをいかに、い空 心 小 桂 香

せをのあまのしほなれてや、などおもふもただならず、いとよろづ阿 チ 小 桂 香

にみだれたり。にしの君も、物はづかしきこちして、わたり給ひ空 心 小 桂 香

にけり。またしる人もなき事なれば、人しれず打ながめてゐたり。タ 小 桂 香

こ君のわたりありくにつけても、むねのみふたがれど、御せうそこ小 桂 香

もなし。あさましと思ひうるかたもなくて、ざれたる心ちに、もの小 桂 香

あはれなるべし。つれなき人も、さこそしづむれど、いとあさはか小 桂 香

にもあらぬ御けしきを、ありしながらのわが身ならば、ととりかへ小 桂 香

空蟬のはにおく露の

⑨この歌全編伊勢集にありと河海其外の抄どもにいはれたるはひがこ
となるよし、拾遺・新釈・小櫛共にいはれたるがごとし。全くいせ集に
も何にもなき歌なり。さて初句は、「うつせみの身をかへてける」とあ
るをうけていへるのみにて、これもただ蟬の事也。三句ののものは、例
のごとくといふ意をふくめて聞くのにて、こゝまでは序なり。「木がく
れて」は、ただかくれてといふ意なるを、蟬の縁に木隠コガレといへるのみなり。
「しのびしのびにぬるる」は、わが身のすぐせのくちをしき事を思ひて、
人しれぬ涙にひそかに袖をぬらすよしなり。此歌も諸注解*得られたるは
なし。

⑩評小君のわたりありくにつけて、空蟬と軒端ツツ、萩との思ふ心をかたみに
書あらはされたるさま、心の中に入て見たらんがごとくにて、いといと
めでたし。上に碁を打たる所にて、かたちのしづまりたるとさわがしき
とをあらはしおきて、ここに至りて其心のけちめをかき出られたるに、
つゆばかりも勢ひのはづれたることなきは、いともいともめづらしき筆
つきなりけり。さてここに歌をもて此巻をとぢめたるは、はじめに「ね
られ給はぬままに」と、ゆくりなくふと書出たる首尾にて、わざとかく
歌の末に詞なくて終られけんとおぼえて、いひしらずとのひたり。見
ん人よくよく味はひ考ふべし。

す物ならねど、しのびがたければ、この御たたうがみのかたつかた
に、

空蟬羽のはにおく露のこかくれてしのびしのびにぬるる袖かな。